

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第296集

蛇塚遺跡群

# 野馬久保遺跡Ⅲ

長野県佐久市猿久保 野馬久保遺跡Ⅲ発掘調査報告書

2023. 3

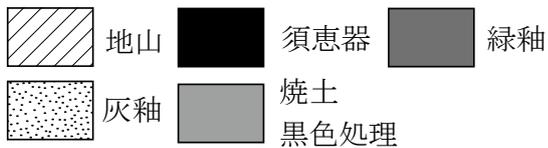
佐久市教育委員会

## 例言

1. 本書は、有限会社新栄住宅が行う宅地造成工事に伴う蛇塚遺跡群野馬久保遺跡Ⅲの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 有限会社新栄住宅 代表取締役 工藤末弘
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 蛇塚遺跡群 野馬久保遺跡Ⅲ(AHBNⅢ) 224㎡
5. 所在地 佐久市猿久保字野馬窪162-11 他2筆
6. 調査期間 令和4年5月10日～20日(現場発掘作業)  
令和4年5月～令和5年3月(報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)・溝(M)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



発掘調査状況

## 目次

### 例言・凡例・目次

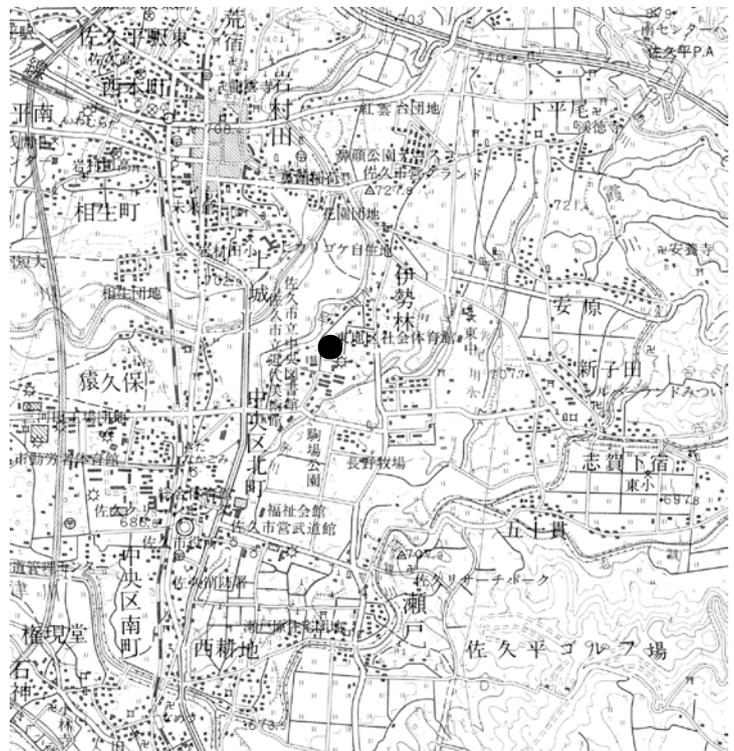
#### 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

1. 立地と経過
2. 調査体制
3. 調査日誌
4. 遺構・遺物の概要
5. 標準土層
6. 調査の方法

#### 第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址
2. 土坑
3. 溝状遺構
4. ピット

#### 第Ⅲ章 調査の総括



第1図 野馬久保遺跡Ⅲ位置図

## 第 I 章 発掘調査の経緯

### 1. 立地と経過

野馬久保遺跡Ⅲは、佐久市猿久保に所在し、蛇塚遺跡群の南西よりに位置する。遺跡は台地上の縁近くに立地する。台地周辺の海拔は705m前後を測る。

本遺跡の周辺は、長野県立武道館や佐久市創錬センター建設等により多くの開発が行われ、先行して埋蔵文化財発掘調査が数多く行われている地域である。周辺の遺跡としては「L」字状の溝に囲まれた中世の屋敷跡が検出された野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲや平安時代の集落が検出された野馬窪遺跡Ⅳ・Ⅶ等がある。特にこれら平安時代の竪穴住居跡からは「墨書」土器が多く出土する傾向にある。

今回、遺跡群内において有限会社新栄住宅により宅地造成の計画がされ、市教育委員会を通し県教育委員会に文化財保護法93条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行い、その結果から遺跡の保護措置がとれない道路部分で記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。

なお、発掘調査に当たっては開発関係者・地権者・隣接住民の方々に多大なるご理解とご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

### 2. 調査体制

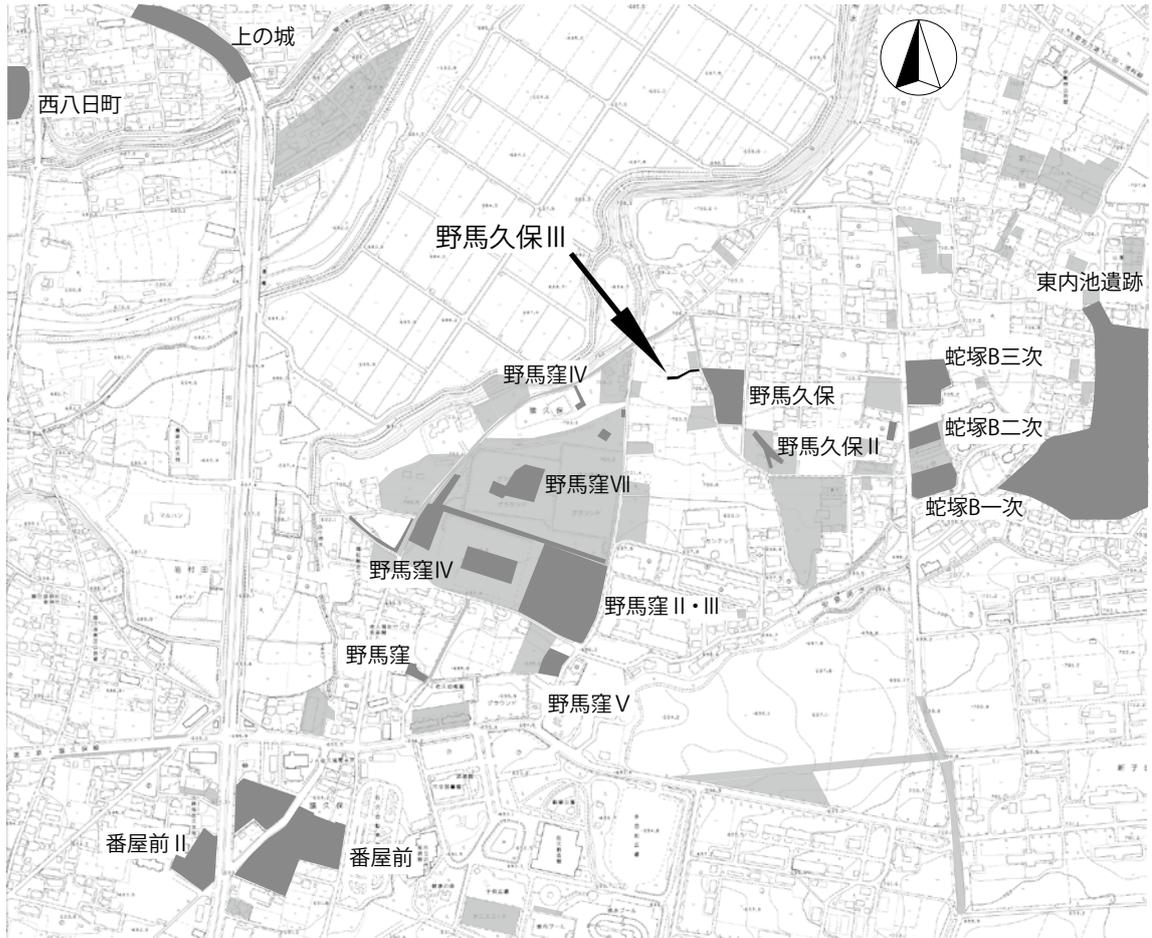
調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	吉岡道明					
事務局	社会教育部長	土屋 孝						
	文化振興課長	中沢栄二						
	企画 幹	井上 剛						
	文化財調査係長	伊澤信子(4～6月)	山本秀典(7月～)					
	文化財調査係	小林眞寿	富沢一明	上原 学	久保浩一郎	松下友樹		
調査員		小林妙子	田中ひさ子	大矢志慕	小林敏雄			
		箕輪由紀	渡辺 学	原 園子	堀籠まゆみ			
		清水律子	柳澤孝子	堀籠保子				

### 3. 調査日誌

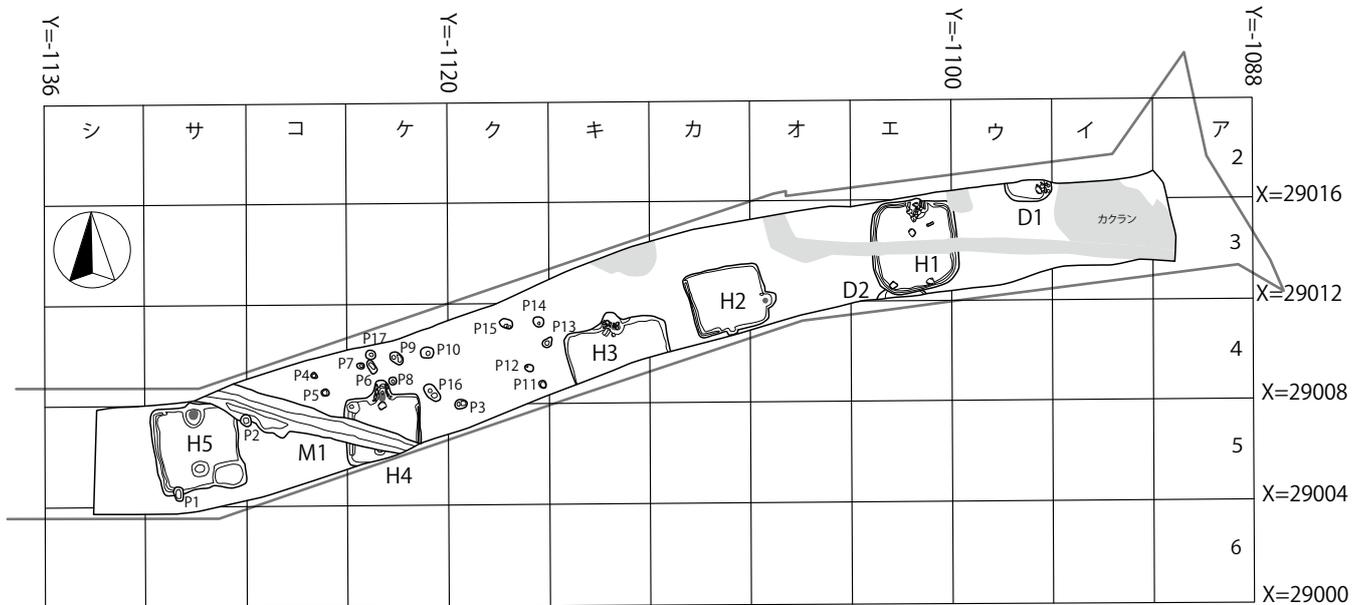
令和4年3月31日	有限会社新栄住宅より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
4月4日	長野県教育委員会へ市教育委員会より3佐教文振第1009-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
4月8日	長野県教育委員会より4教文第7-47号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
4月27日	市教育委員会により試掘・確認調査の実施
4月28日	有限会社新栄住宅より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
5月2日	市教育委員会より見積回答
5月9日	有限会社新栄住宅と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
5月10日～20日	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成業務を行う。
令和5年3月	調査報告書を刊行する。記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

### 4. 遺構・遺物の概要

遺 構	竪穴住居址	5軒(平安)	溝状遺構	1本	土 坑	2基
遺 物	土師器	須恵器	緑釉陶器	灰釉陶器		
	土製品(土錐)	鉄製品(鉄鏃)				



第2図 周辺遺跡位置図



第3図 調査全体図(1:300)

## 5. 標準土層

今回の調査地点は南方向に僅かに傾斜する台地上で、基本層序は3層に分かれる。

第Ⅰ層 (10YR4/1) 褐灰色土 (耕作土)

第Ⅱ層 (10YR2/1) 黒色土

第Ⅲ層 (10YR5/6) 黄褐色土 (浅間山P1)

Ⅱ層は調査地点西側の僅かに傾斜する谷地形で確認できる。Ⅱ層上面が遺構確認面であるが、遺跡東側は耕作土下がⅢ層となる。

## 6. 調査の方法

### 遺構調査・遺構測量

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

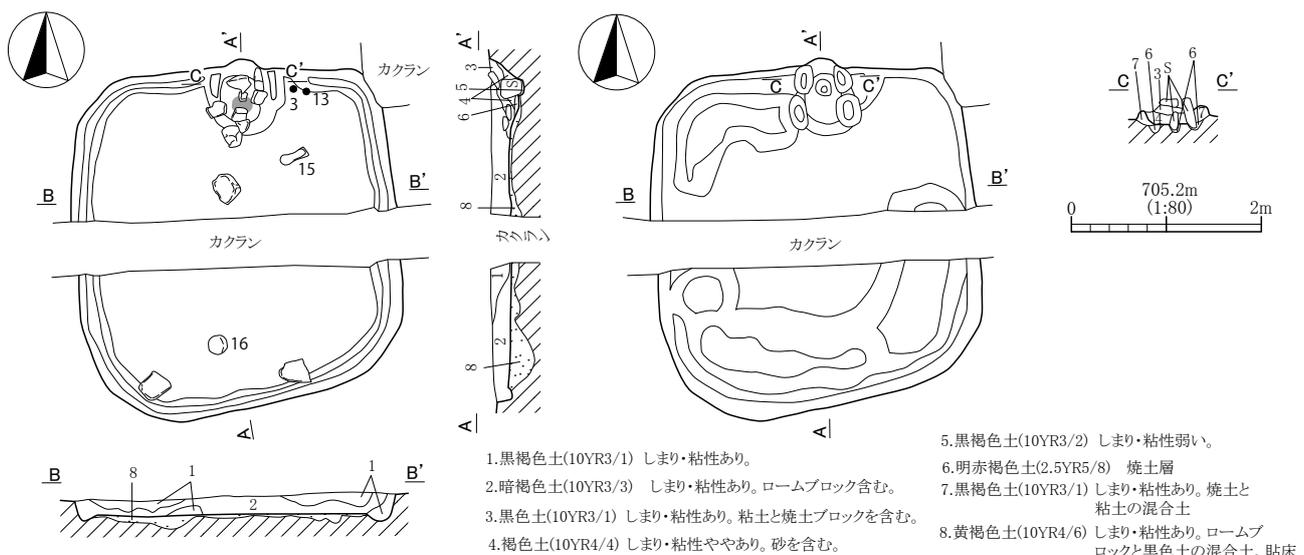
遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNo.を付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構No.で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

### 遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は1/20で測量実測した図を1/40で修正し、遺物は1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

### 写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼カメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第4図 H1号住居址実測図

## 第II章 遺構と遺物

### 1. 竪穴住居址

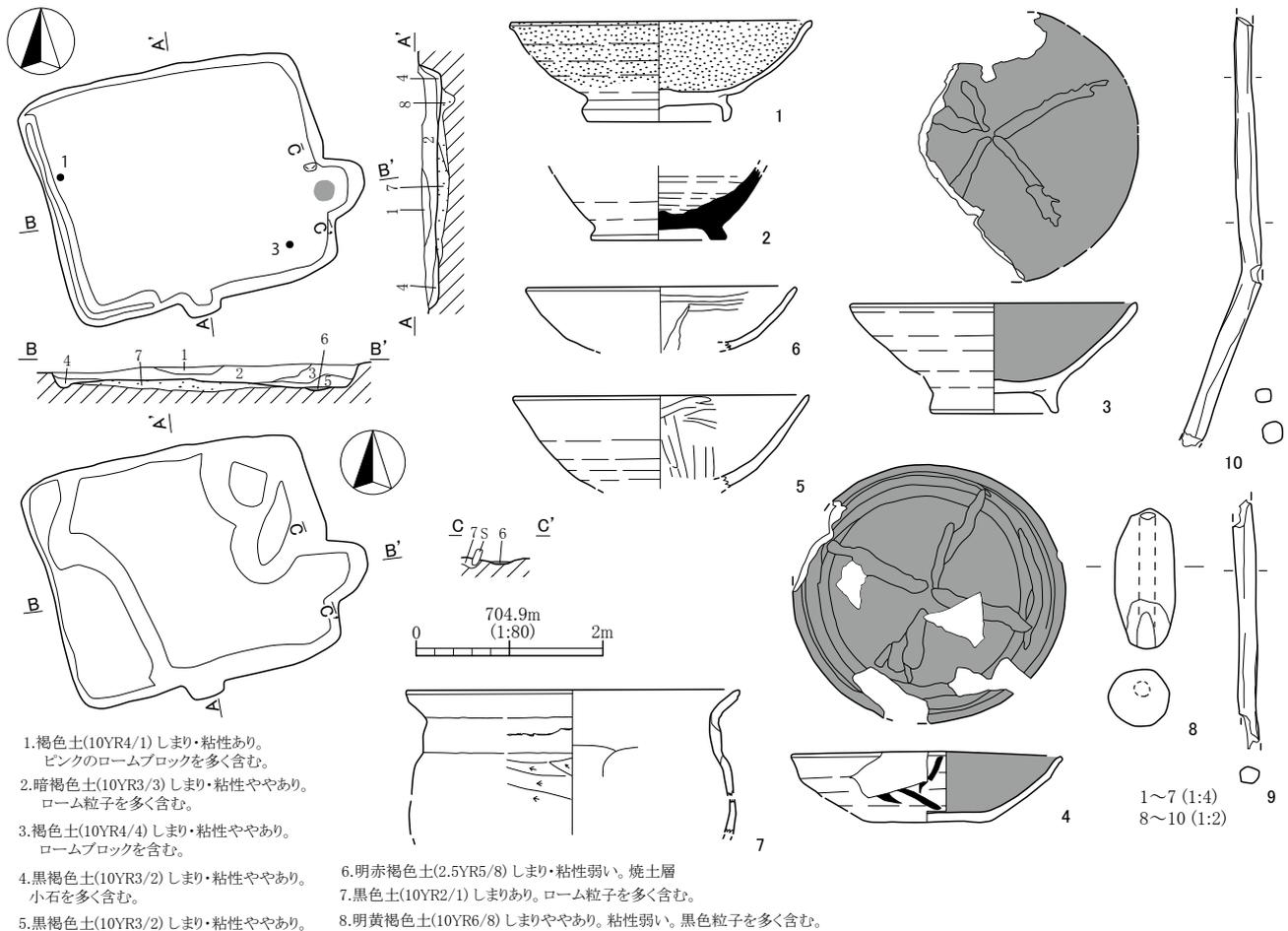
#### (1) H 1 号住居址

本址は調査地東端で検出された。残存状態は住居址中央部がカクランにより削平されている。形態は方形と考えられ、カマドは北壁で検出された。規模は南北長3.25m、東西長2.96mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.22mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-3°-Wを測る。床面積は8.66㎡を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.02~0.25mを測る。壁溝は全周する。住居掘り方は北東コーナーを除き、壁際が中央部より一段低くなる。

カマドは礫と粘土で構築されていたと考えられ、袖部は一部原形を保っていた。火床部は顕著で、軽石製の支脚石が原位置を保って立っていた。

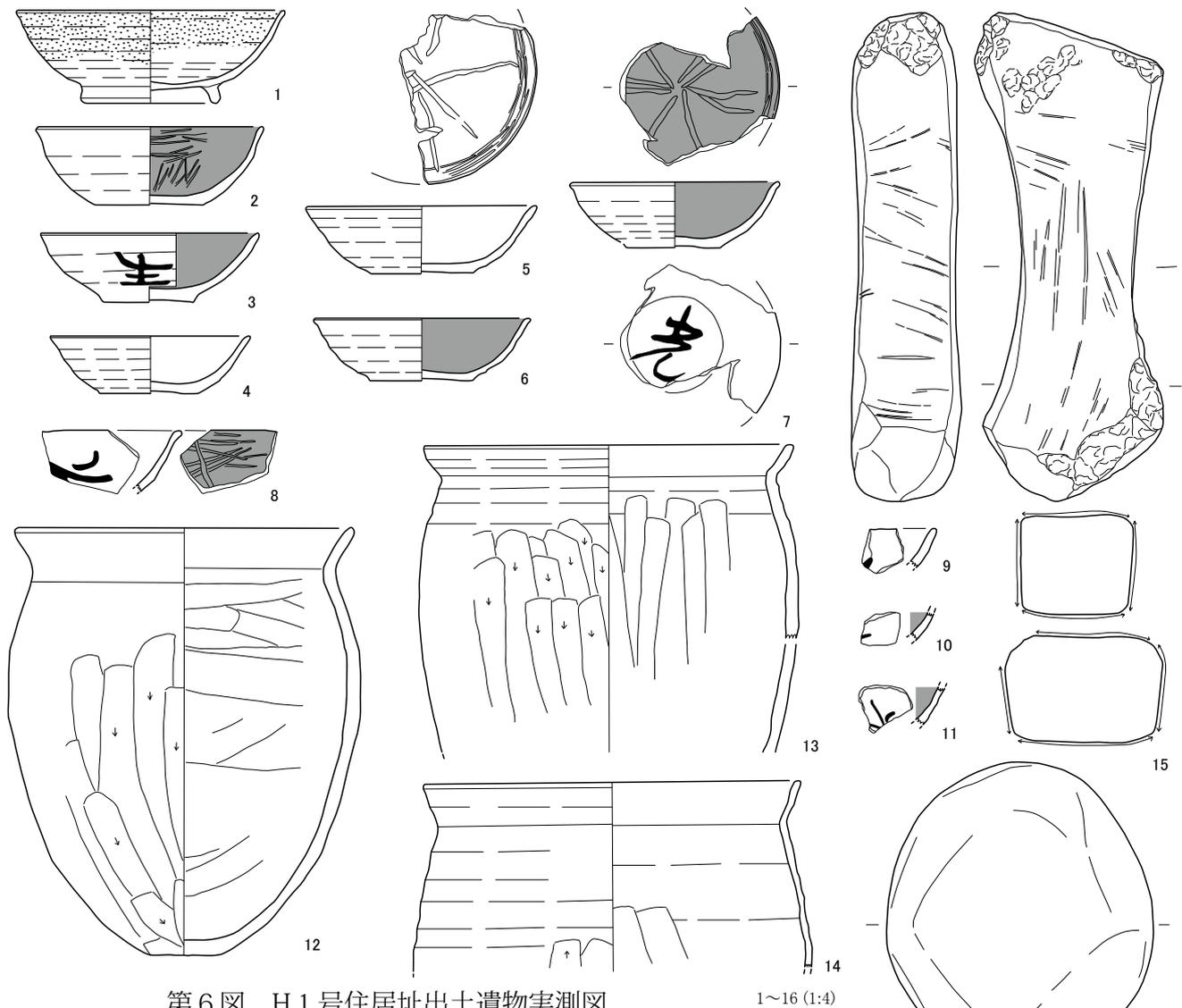
出土遺物はカマド周辺を中心に覆土内より出土した。1は灰釉陶器碗であり、釉は漬け掛け状を呈する。2~11は土師器坏である。3・7~11は外面に墨書或いは墨痕が確認できる。3は「生」、7は「光」か。5と7は内面見込み部に暗文風のミガキが施されている。12~14は土師器甕である。12はほぼ全容が把握できる個体で、いわゆる「ロクロ甕」の形態をとるが、胴部上半の顕著なロクロ痕は確認できない。13と14はいわゆる「ロクロ甕」と呼ばれる甕であり、胴部下半のヘラ削りと胴部上半のロクロ痕が明瞭である。15は敲击痕を伴う砥面が顕著な石製品である。石材が通常の砂岩系砥石と異なり、緻密で硬質な火成岩を使用している。16は円形の礫で、顕著な使用痕は確認できなかったが床面上よりの出土であり図化した。

本址はこれらの出土遺物から9世紀後半に比定されると考えられる。



1. 褐色土(10YR4/1)しまり・粘性あり。  
ピンクのロームブロックを多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性ややあり。  
ローム粒子を多く含む。
3. 褐色土(10YR4/4)しまり・粘性ややあり。  
ロームブロックを含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性ややあり。  
小石を多く含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性ややあり。
6. 明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり・粘性弱い。焼土層
7. 黒色土(10YR2/1)しまりあり。ローム粒子を多く含む。
8. 明黄褐色土(10YR6/8)しまりややあり。粘性弱い。黒色粒子を多く含む。

第5図 H 2 号住居址及び出土遺物実測図



第6図 H1号住居址出土遺物実測図

1~16 (1:4)

## (2) H2号住居址

本址は調査地中央で検出された。残存状態は良好で、形態は方形である。カマドは東壁で検出された。規模は南北長2.32m、東西長2.80mを測る。壁高さは北東コーナー付近で0.26mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-77° - Eを測る。床面積は6.21㎡を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.02~

0.15mを測る。壁溝は西壁で検出された。住居掘り方は西側が一段高くなり、北東コーナー部分は一段低く掘り窪められていた。カマドは火床部のみ検出され、袖部は原形を保っていなかった。

本址からの出土遺物は比較的多く、10点を図示した。1は灰釉陶器碗である。釉は漬け掛けと考えられる。2は須恵器壺の底部と考えられる。3は土師器碗で内面黒色処理と暗文が施されている。4~6は土師器坏であり、4は内面黒色処理し、外面体部に判読不明の墨書が確認できる。7はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕である。8は土錐で、一部欠損している。9と10は鉄軸でカマド脇から出土した。用途は不明である。

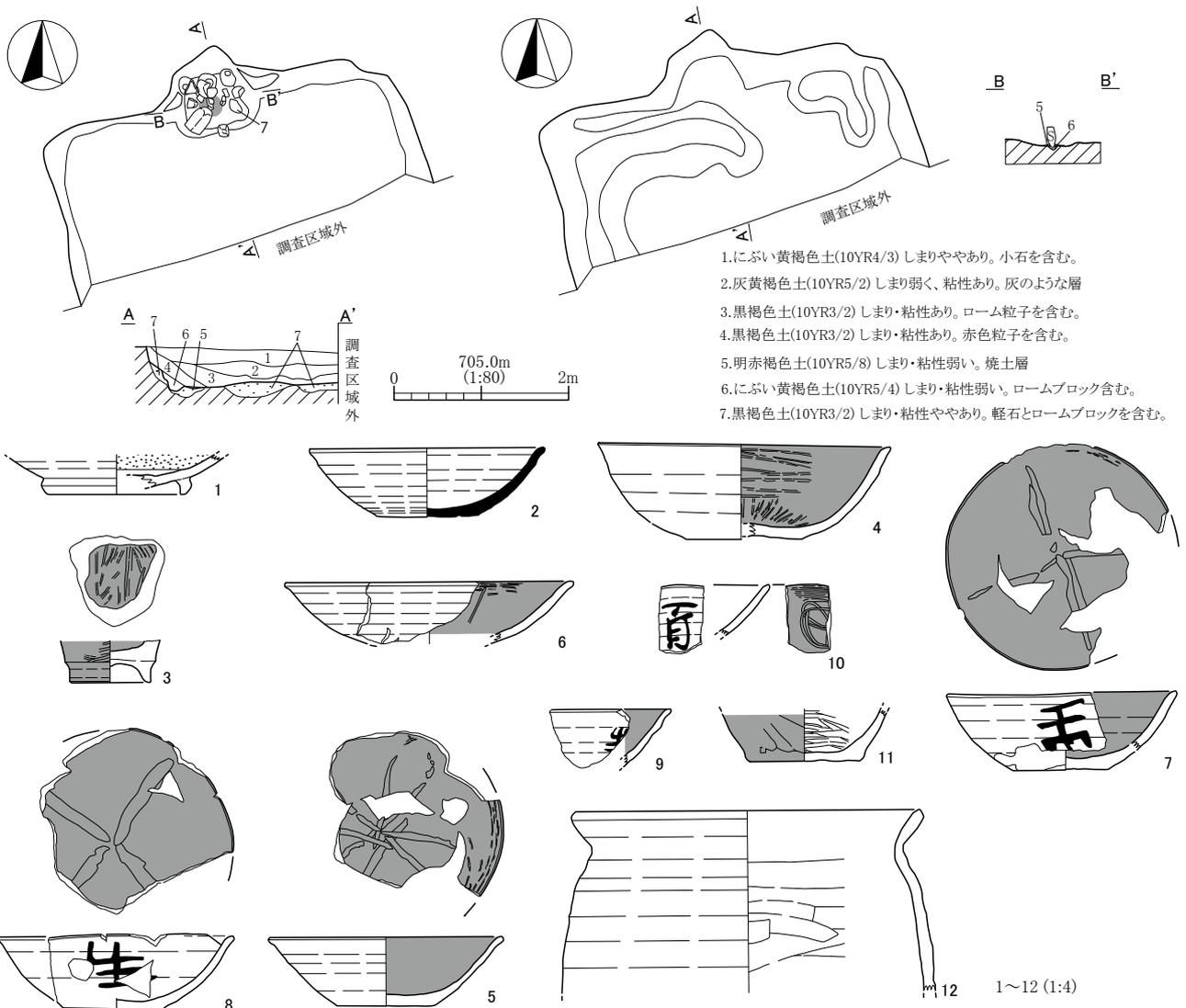
本址はこれらの出土遺物から9世紀後半の所産時期が考えられる。

### (3) H 3号住居址

本址は調査地中央で検出された。残存状態は良好であるが、南側は調査区域外となる。形態は方形と考えられる。カマドは北壁で検出された。規模は東西長3.84mを測る。壁高さは北東コーナー付近で0.43mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-16°-Wを測る。床面積は検出部分で5.80㎡を測る。覆土は自然堆積であるが、覆土中層に白色の灰層が確認された。床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.08~0.16mを測る。住居掘り方は中央部分が一段高くなる。カマドは火床部と支脚石のみ検出され、袖部は原形を保っていなかった。

本址からの出土遺物は、覆土やカマド内より多く出土した。12点を図示した。1は灰釉器碗である。高台はいわゆる「三日月高台」を呈する。3は残存率が低く不確実であるが土師器耳皿と考えられる。4~10は土師器坏で、7~9は「生」の様な墨書が確認できる。10も同じく墨書で「頁」か。11は土師器小型甕であり、外面が黒色処理されている。また、内面は叩きのような成形痕があり、胎土に金雲母を含む。甲斐系土器とも考えられる。12は土師器口クロ甕である。

本址はこれら出土遺物から9世紀後半の所産時期が考えられる。



第7図 H 3号住居址及び出土遺物実測図

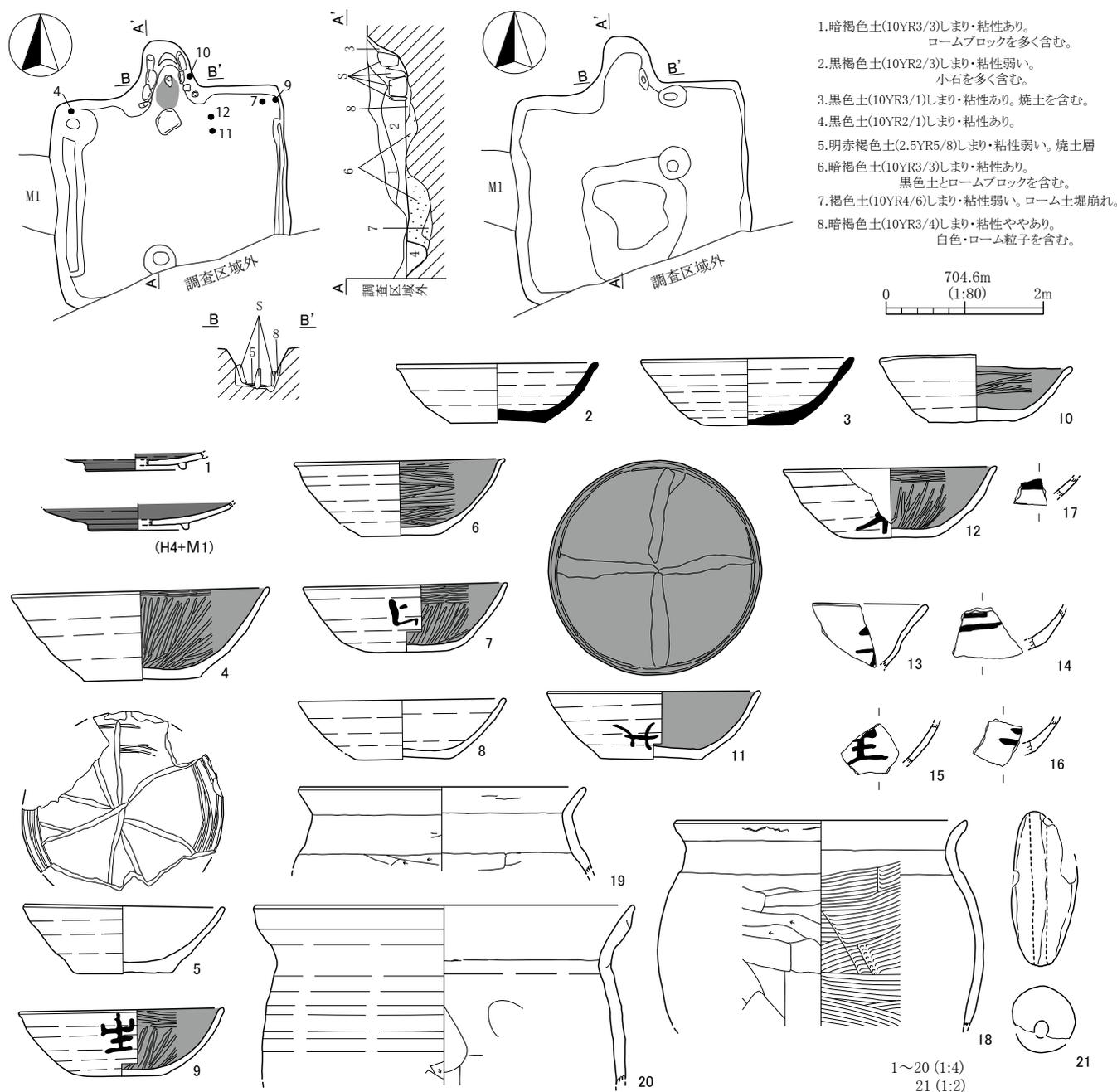
### (4) H 4号住居址

本址は調査地中央で検出された。残存状態は南東コーナーが調査区域外、中央部をM1号溝状遺構に上部を削平されていた。形態は方形である。カマドは北壁で検出された。規模は東西長2.42mを測

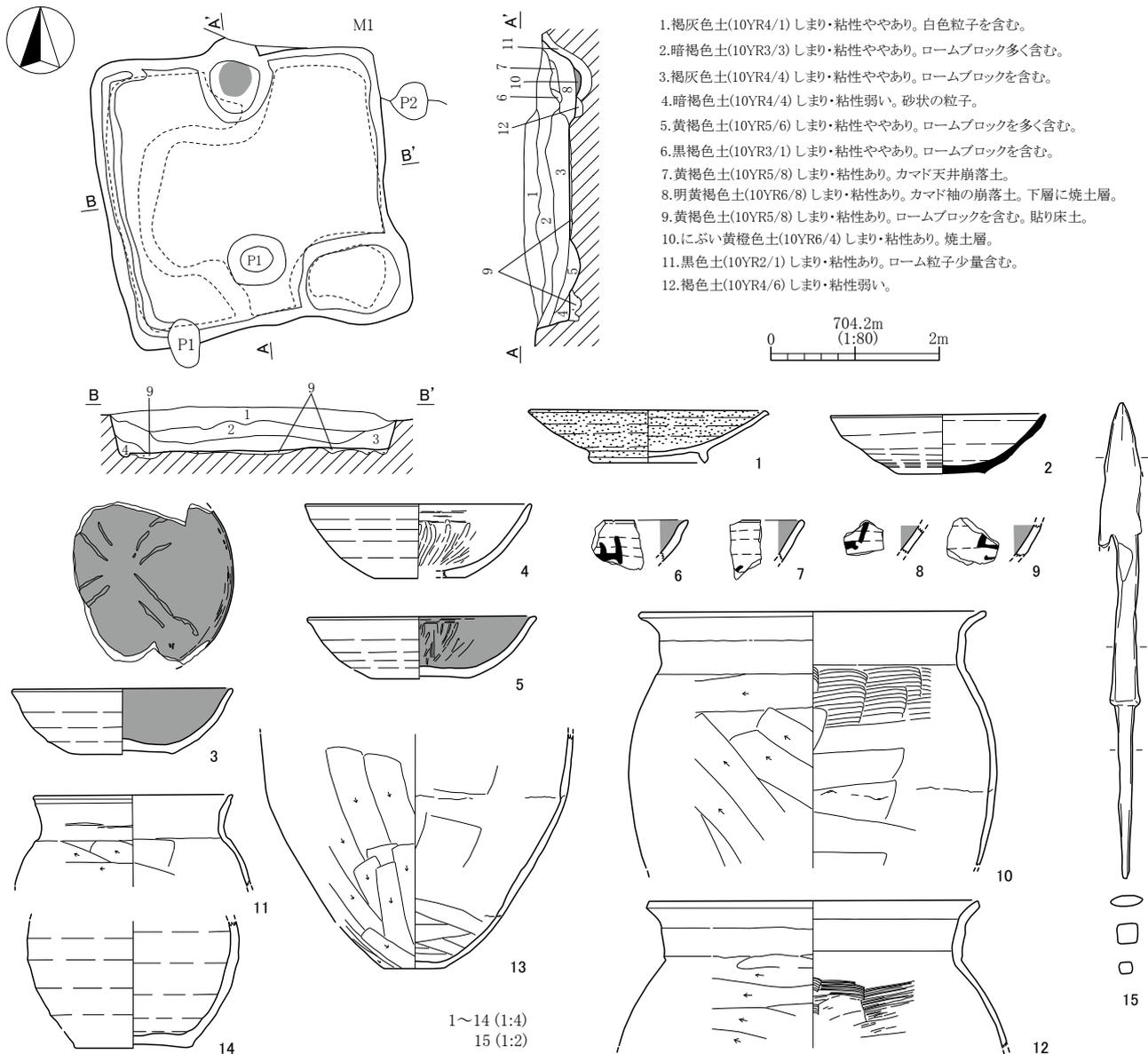
る。壁高さは北東コーナー付近で0.55mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-4°-Wを測る。床面積は検出部で5.18㎡を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.08~0.32mを測る。壁溝は東壁と西壁で検出された。住居掘り方は中央部に深さ0.29mの楕円状の掘り込みが検出された。カマドは火床部・支脚石と壁に沿うように配置された袖構築礫が検出された。

本址からの出土遺物はカマド及び周辺から多く出土した。1は緑釉陶器皿で、下に示した図はM1-1と同一個体と考え図上復元したものである。2と3は須恵器坏、4~17は土師器坏であり、体部外面に墨書或いは墨痕が確認できるものがある。18と19はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕である。20はロクロ成形の土師器甕である。21は一部欠損するが土錐である。

本址はこれらの出土遺物から9世紀後半の所産時期が考えられる。



第8図 H4号住居址及び出土遺物実測図



第9図 H5号住居址及び出土遺物実測図

(5)H5号住居址

本址は調査地西端で検出された。残存状態は住居北壁とカマド一部がM1号溝状遺構により削平されている。形態は方形である。カマドは北壁で検出された。規模は南北長と東西長共に3.0mを測る。壁高さは南西コーナー付近で0.48mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-9°-Wを測る。床面積は8.94㎡を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.06~0.24mを測る。壁溝は西壁で検出された。ピットは一か所確認され、径0.68m・深さ0.16mを測る。また、住居南東コーナー部には壁よりもやや外側に張り出す土坑状の掘り込みが確認できた。長軸1.36m、深さ0.06~0.16mを測る。土坑底面は凹凸が激しかった。住居掘り方は西側が一段低くなる。カマドは火床部のみ検出され、袖部は原形を保っていなかった。

本址からの出土遺物は15点を図示した。1は灰釉陶器皿。2は須恵器坏。3~9は土師器坏で、6~9に墨書か墨痕が確認できる。10~13はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕であり、14はロクロ成形の甕である。15はほぼ全容が把握できる鉄鏃である。

本址はこれらの出土遺物から9世紀後半の所産時期が考えられる。

第1表 出土遺物観察表

単位 cm・g

H1	種別	器種	法量			成形・調整・文様				推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面		備考	出土位置
1	灰釉陶器	碗	(15.8)	(8.2)	5.5	ロクロナデ 施釉(漬け掛け)	ロクロナデ 釉漬け掛け 底部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測		III・IV区	
2	土師器	坏	(13.4)	(6.4)	4.6	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り	回転実測		I区・カマド	
3	土師器	坏	12.9	5.3	4.1	ロクロナデ 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り 墨書	完全実測			
4	土師器	坏	11.8	5.8	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測		カマド	
5	土師器	坏	(13.6)	(6.0)	4.0	ロクロナデ ミガキ 暗文	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測		I区	
6	土師器	坏	(12.8)	(6.0)	3.7	ロクロナデ 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測		IV区	
7	土師器	坏	(12.4)	5.6	3.9	ロクロナデ ミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り 墨書	完全実測		IV区・IV区ホリ	
8	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		III区	
9	土師器	坏	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 墨書	破片実測		III区	
10	土師器	坏	-	-	-	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		III区	
11	土師器	坏	-	-	-	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		III区 ホリ	
12	土師器	甕	(20.0)	(4.6)	25.4	ヘラナデ	ヘラナデ	回転実測		I・II・III区・カマド	
13	土師器	甕	(21.8)	-	<18.2>	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測		I・II区・カマド	
14	土師器	甕	(22.2)	-	<11.1>	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測		カマド	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
15	石器	砥石	28.9	11.2	6.5	3.22kg	砥面数4 両端部に敲打痕				
16	石器	不明	18.1	15.7	8.4	1.87kg					
H2	種別	器種	法量			成形・調整・文様				推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面		備考	出土位置
1	灰釉陶器	碗	(16.1)	7.7	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ 重ね焼痕あり 内外施釉(漬け掛け) 底部高台貼付→ロクロナデ	回転実測		III区	
2	須恵器	壺	-	(7.0)	<3.9>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ナデ→高台貼付→ナデ	回転実測		I区	
3	土師器	碗	(15.2)	6.6	5.9	ミガキ→黒色処理 暗文	ロクロナデ 底部回転糸きり→高台貼付	回転実測		I区	
4	土師器	坏	(14.4)	6.6	3.9	ミガキ→黒色処理 暗文	ロクロナデ 墨書 判断不明 底部回転糸切り	完全実測		I・IV区	
5	土師器	坏	(15.7)	-	<5.0>	ミガキ	ロクロナデ	回転実測		I区・カマド	
6	土師器	坏	(14.4)	-	<3.4>	ロクロナデ →ミガキ 暗文	ロクロナデ	回転実測		I区	
7	土師器	壺	(17.7)	-	<5.8>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測		II区ホリ	
8		土錘	3.8	1.6	1.6		ナデ			カマド	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
9	金属製品	不明	<6.70>	<0.55>	<0.60>	<6.35>	両端欠損			II区	
10	金属製品	不明	<11.50>	<0.60>	<0.60>	<12.44>	両端欠損			II区	
H3	種別	器種	法量			成形・調整・文様				推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面		備考	出土位置
1	灰釉陶器		-	(7.4)	<2.3>	ロクロナデ 施釉(刷毛塗)	ロクロナデ 高台貼付	回転実測		I区ホリ	
2	須恵器	坏	(13.4)	(5.8)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラ切り	回転実測		II区	
3	土師器	耳皿	-	(4.6)	<2.4>	ミガキ 黒色処理	ミガキ 黒色処理 底部回転糸切り→高台貼付	回転実測		II区	
4	土師器	坏	16.7	(6.6)	5.4	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測		II区	
5	土師器	坏	(13.4)	(5.6)	4.0	ミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り	回転実測		I区	
6	土師器	坏	(16.4)	-	<3.6>	ミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ ヘラ記号	回転実測		II区	
7	土師器	坏	(13.2)	5.5	4.4	ロクロナデ 暗文 黒色処理 ミガキ	ロクロナデ 墨書 底部右回転糸切り	完全実測		I・II区	
8	土師器	坏	(13.4)	5.7	4.4	ロクロナデ→暗文 黒色処理 ミガキ	ロクロナデ 墨書 底部右回転糸切り	完全実測		II区	
9	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		I区	
10	土師器	坏	-	-	-	暗文 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		I区	
11	土師器	甕	-	(6.2)	<3.0>	タタキ?	ヘラケズリ 黒色処理	回転実測		II区	
12	土師器	甕	(20.0)	-	<10.5>	ヘラナデ 口縁コナデ	ロクロナデ	回転実測		I区	
H4	種別	器種	法量			成形・調整・文様				推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面		備考	出土位置
1	緑釉陶器	皿	-	(6.4)	<1.1>	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉 底部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測		I区・M1	
2	須恵器	坏	(12.8)	(6.0)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測		I区	
3	須恵器	坏	(13.6)	(6.0)	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測		カマド	
4	土師器	坏	16.4	7.4	5.7	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測			
5	土師器	坏	12.8	6.3	4.3	ロクロナデ ミガキ 暗文	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測		カマド	
6	土師器	坏	(13.4)	5.1	4.8	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	完全実測		I区	
7	土師器	坏	13.0	5.5	4.3	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り 墨書	完全実測		II区・M1	
8	土師器	坏	(13.2)	6.1	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測		カマド	
9	土師器	坏	13.0	5.6	4.3	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り 墨書部 口唇タール付着	完全実測			
10	土師器	坏	12.2	5.6	4.3	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り	完全実測			
11	土師器	坏	13.6	6.5	4.4	ロクロナデ ミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り 墨書	完全実測			
12	土師器	坏	13.5	6.1	4.5	ロクロナデ ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り 墨書	完全実測			
13	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		I区	
14	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		II区	
15	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		II区	
16	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		II区	
17	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測		カマド	

第2表 出土遺物観察表(2)

単位 cm・g

H4	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
18	土師器	甕	(18.3)	-	<13.1>	ハケ目の残るナデ	ヘラケズリ	回転実測	I区 カマド
19	土師器	甕	(18.0)	-	<5.7>	ハケ目の残るナデ	ヘラケズリ	回転実測	II区
20	土師器	甕	(23.8)	-	<11.4>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	カマド
21		土錘	5.0	2.1	<2.1>		ナデ		I区

H5	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	皿	14.2	6.6	3.1	ロクロナデ 施釉(刷毛塗)	ロクロナデ 施釉(刷毛塗) 高台貼付	完全実測	
2	須恵器	坏	12.8	5.2	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラ切り	完全実測	IV区
3	土師器	坏	(13.2)	(5.8)	3.9	ミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り	回転実測	I・IV区
4	土師器	坏	(13.4)	(5.4)	<4.4>	ミガキ	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測	IV区
5	土師器	坏	(13.6)	6.1	3.7	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	カマド
6	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測	
7	土師器	坏	-	-	-	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測	I区
8	土師器	坏	-	-	-	黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測	
9	土師器	坏	-	-	-	黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測	IV区
10	土師器	甕	(20.6)	-	<15.3>	ヘラナデ(ハケナデ)	ヘラケズリ	回転実測	I・II区 カマド
11	土師器	甕	(11.8)	-	<5.5>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	P1
12	土師器	甕	(19.6)	-	<8.8>	ハケ目の残るナデ	ヘラケズリ	回転実測	I・III区
13	土師器	甕	-	3.5	<14.0>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	II・III区 カマド P1
14	土師器	甕	-	7.0	<7.6>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	IV区

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
15	金属製品	短頸鉄	14.2	<1.20>	0.7	17.52	鐵身部欠損 返し、錆あり	

D1	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	碗	(12.7)	7.9	4.7	ナデ みこみ部のみミガキ→黒色処理	ロクロナデ 切り離し後高台貼付	完全実測	
2	土師器	坏	(12.4)	(4.4)	3.8	ロクロナデ 煤付着	ロクロナデ 墨書	回転実測	
3	土師器	坏	(12.4)	(4.6)	3.7	ロクロナデ 煤付着	ロクロナデ	回転実測	
4	土師器	坏	(12.2)	(4.4)	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ→回転糸切り	回転実測	

M1	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	緑釉陶器	皿	-	-	-	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実測	
2	灰釉陶器	碗	-	(6.6)	<1.8>	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ→回転ヘラ切り 施釉	回転実測	
3	土師器	碗	-	(7.2)	<1.5>	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切り→高台貼付→黒色処理	回転実測	
4	土師器	坏	(11.6)	-	<2.6>	ロクロナデ→口縁部ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 墨書	回転実測	
5	土師器	坏	-	-	-	暗文→黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測	

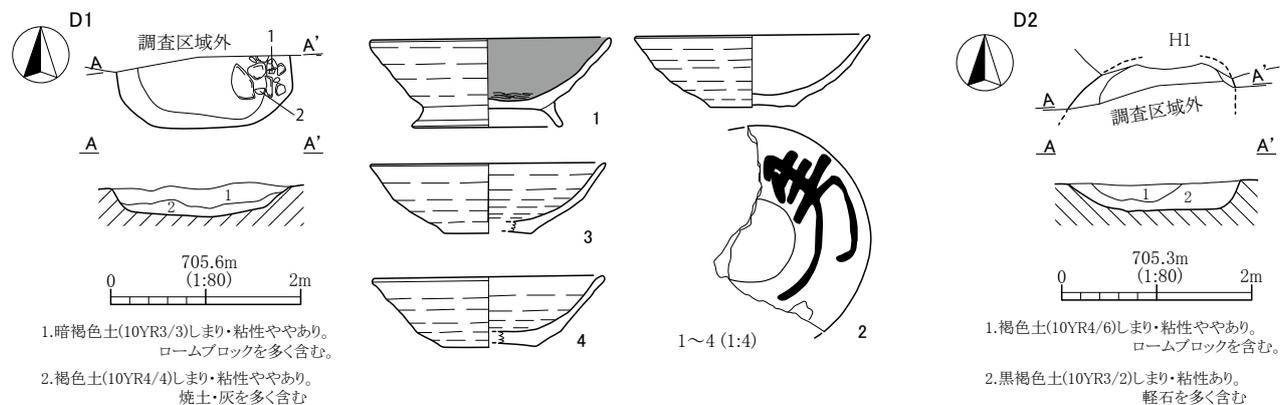
  

Gr	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値( )残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	壺	-	(8.8)	<2.8>	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 切り離し後高台貼付 施釉	回転実測	
2	土師器	坏	-	-	-	ナデ→黒色処理	ロクロナデ 施釉	破片実測	
3	銅製品	古銭					寛永通宝?		

2. 土坑

(1) D1号土坑

本址は調査地東端で検出された。形態は楕円形と考えられるが、北側が調査区域外となるため全容は不明である。規模は長軸長1.84・深さ0.23mを測る。覆土は自然堆積であったが、本址東側に焼



第10図 D1号及び出土遺物・D2号土坑実測図

成を受けた礫や焼土が纏まって検出された。

本址からの出土遺物は4点を図示した。1は内面黒色処理された土師器碗である。2～4は土師器坏であり、2は体部外面に墨書が確認できる。判読は不明である。本址はこれらの出土遺物から9世紀後半の所産時期が考えられる。

### (2) D2号土坑

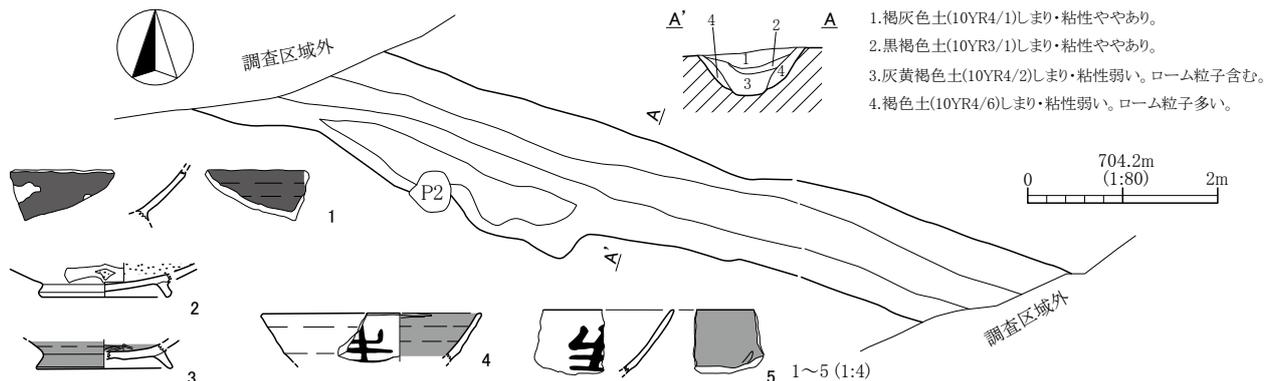
本址は調査地中央で検出された。残存状態は北側をH1号住居址に削平されており、南側は調査区域外となる。形態は不明である。規模は長軸長1.60m・深さ0.24mを測る。本址からの出土遺物は土師器坏片があったが小片の為図示できなかった。

## 3. 溝状遺構

### (1) M1号溝状遺構

本址は調査地中央で検出された。東西方向に延びる溝状遺構で、検出された長さは7.68mを測る。規模は幅0.88～1.49m、深さ0.50～0.52mを測る。東端と西端の比高差は0.13m程で、ほぼ平坦である。断面形態は逆台形で、特に溝底面は平坦であった。

本址から出土遺物は5点を図示した。1は緑釉陶器皿と考えられる。H4号住居跡から出土した破片と同一個体と考えられる。2は灰釉陶器碗である。3は土師器碗で内外面ともに黒色処理されている。4と5は土師器坏であり、内面は黒色処理され、外面には「生」?と考えられる墨書が確認できる。これらの出土遺物から本址は9世紀後半から10世紀前半の所産時期が考えられる。



第11図 M1号溝状遺構及び出土遺物実測図

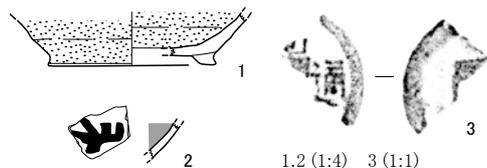
## 4. ピット

今回の調査では17カ所の単独ピットを調査した。ただ、調査区が東西に細長い事から、掘立柱建物址の一部やそれに関係するであろうピットは把握できなかった。各ピットからの出土遺物は表に記載したが、いずれも小片で図示できるものはなかった。

第3表 Pit計測表

(推定 <>残存 (単位 m))

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	重複関係	出土遺物
P1	サ-5	0.57	0.38	0.59	楕円形	H5より新しい	
P2	コ・サ-5	0.44	0.43	0.62	円形	M1より新しい	
P3	ク-4・5	0.50	0.37	0.19	楕円形		土師器内黒坏
P4	コ-4	0.22	0.21	0.14	円形		
P5	コ-4	0.31	0.27	0.15	円形		
P6	ク-4	0.58	0.28	0.18	不整形		
P7	ク-4	0.31	0.24	0.16	楕円形		
P8	ク-4	0.32	0.30	0.15	円形		
P9	ク-4	0.62	0.41	0.27	楕円形		
P10	ク-4	0.54	0.48	0.25	方形		土師器内黒坏
P11	ク-4	0.34	0.26	0.14	楕円形		
P12	ク-4	0.37	0.29	0.35	楕円形		
P13	キ・ク-4	0.47	0.34	0.21	不整形		
P14	ク-4	0.46	0.39	0.35	円形		
P15	ク-4	0.54	0.36	0.61	楕円形		
P16	ク-4	0.80	0.45	0.18	楕円形		
P17	ク-4	0.40	0.39	0.12	円形		



第12図 遺構外出土遺物実測図



### 第三章 調査の総括

今回調査が行われた地点からは竪穴住居跡 5 軒が発見され、平安時代(9世紀後半代)の集落の一部が調査された。この集落は、トレンチ調査の結果から南西側や、東に接する野馬久保遺跡の調査成果から、東側には広がっていない事が判り、今回の調査地点より北側に集落域が展開することが推定できた。周辺の遺跡では県立武道館周辺の野馬窪遺跡Ⅳ・Ⅵ・Ⅶより同時期の集落が発見されているが、地形・距離的にみて別の集落グループのひとつと判断される。

このように、野馬窪地籍には湯川を望む台地縁周辺に約20軒規模の集落グループが展開することが最近の調査により解ってきている。今回の調査結果もその点を補強したことになる。

特にこの周辺に展開する平安時代(9世紀後半)の集落は一辺4～5m規模の竪穴住居が多く、出土遺物の中に皿・碗を中心とする灰釉陶器が含まれ、墨書土器が多い事を特徴とする。今回も光ヶ丘1号窯式期～大原2号窯式の範疇と考えられる資料が出土している。

このような特徴は長土呂地籍の聖原遺跡でもすでに指摘にされている事であるが、猿久保の当遺跡周辺でも同じ傾向が追認されれば、この特徴は佐久平北部全体も視野に入れた事象と考えてよいのかもしれない。今後は、この事象が何に起因するのか考察することが、地域の歴史理解につながっていくと確信する。

以上、雑駁ではあるが今回の調査成果を含めた総括としたい。

第13図 周辺調査遺跡位置図



H 1 号住居址



H 1 号住居址カマド



H 2 号住居址



H 2 号住居址掘り方



H 3 号住居址



H 3 号住居址掘り方



H 4 号住居址



H 4 号住居址カマド

図版 2



H 5 号住居址



H 5 号住居址掘り方



D1号土坑



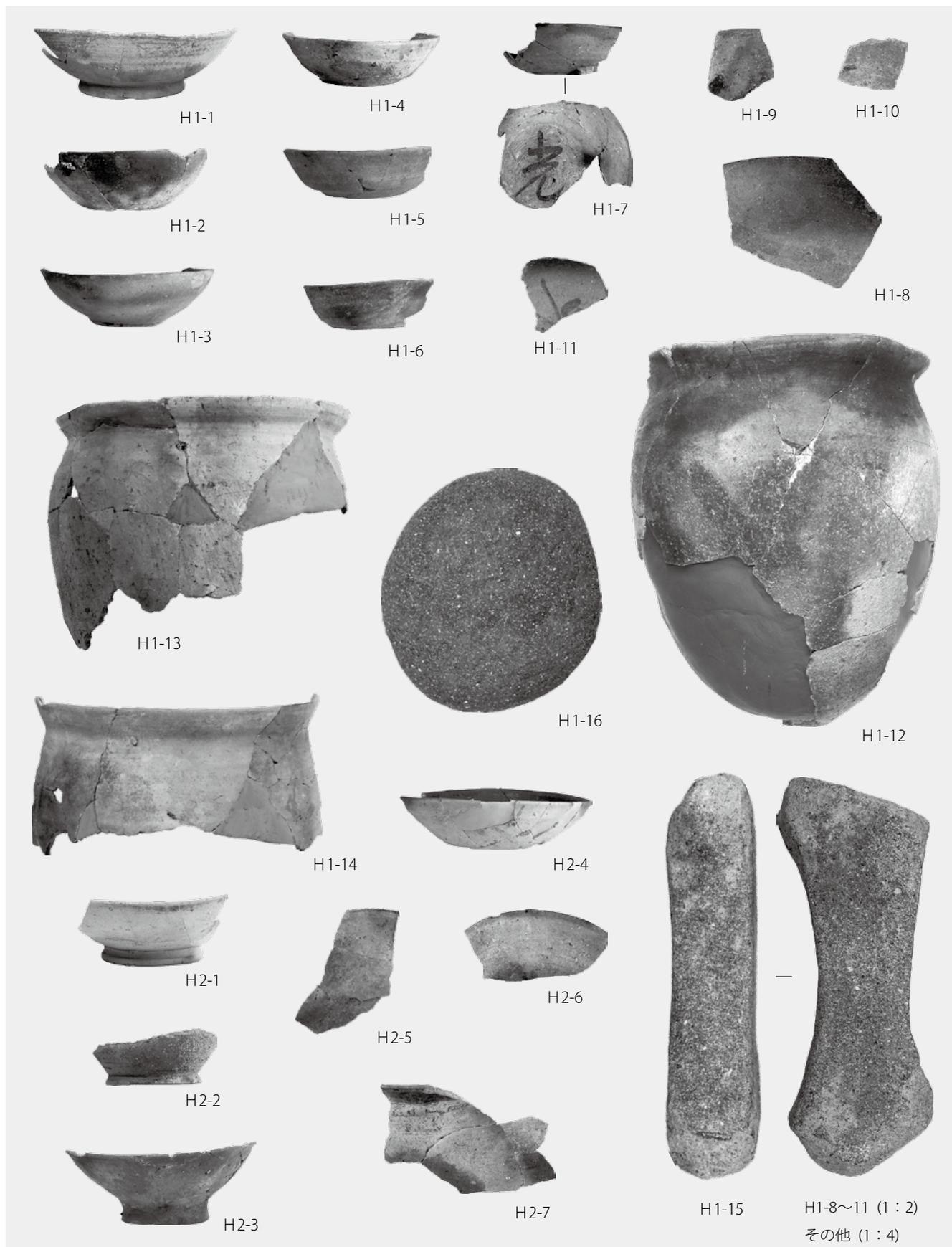
D2号土坑



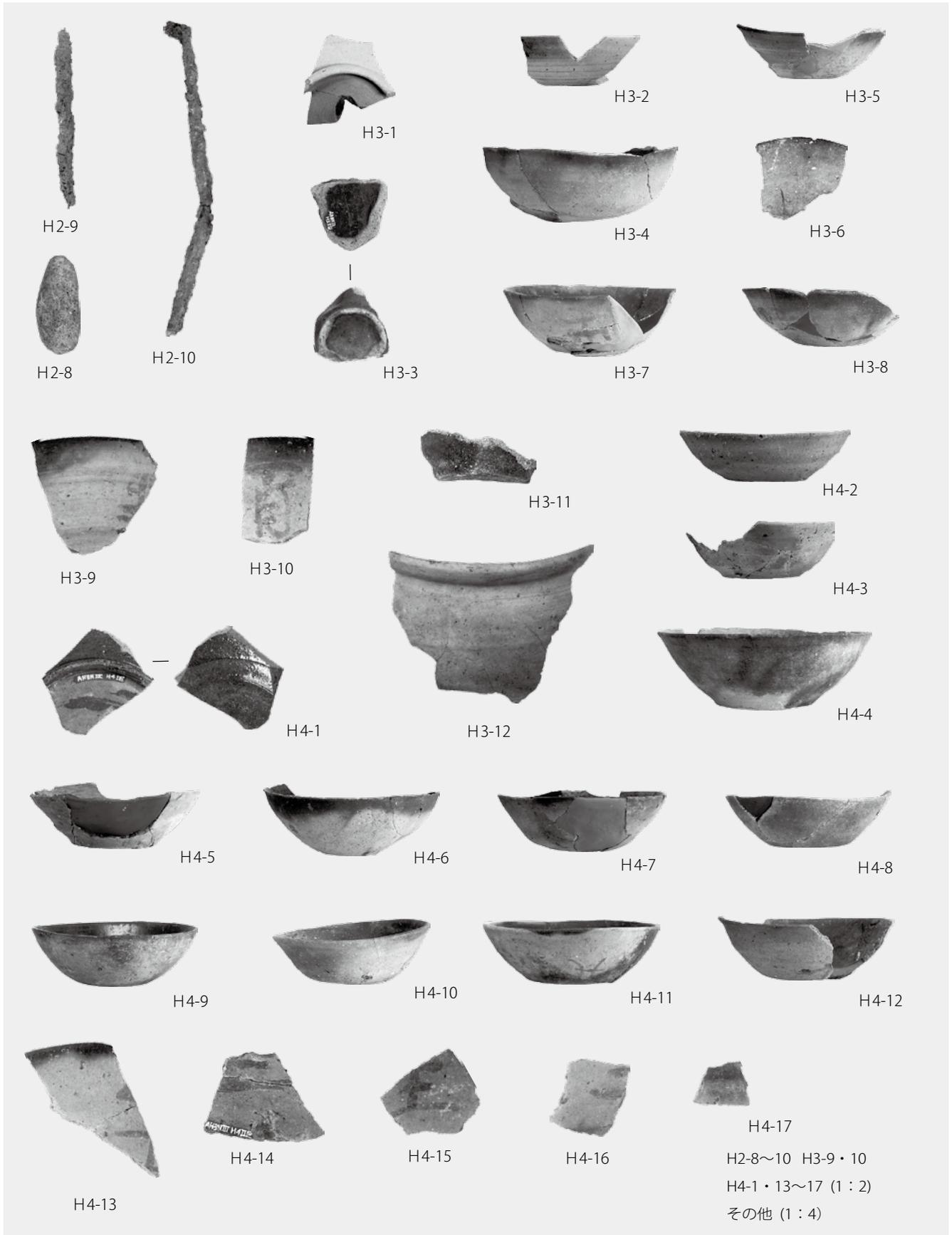
M1号溝状遺構

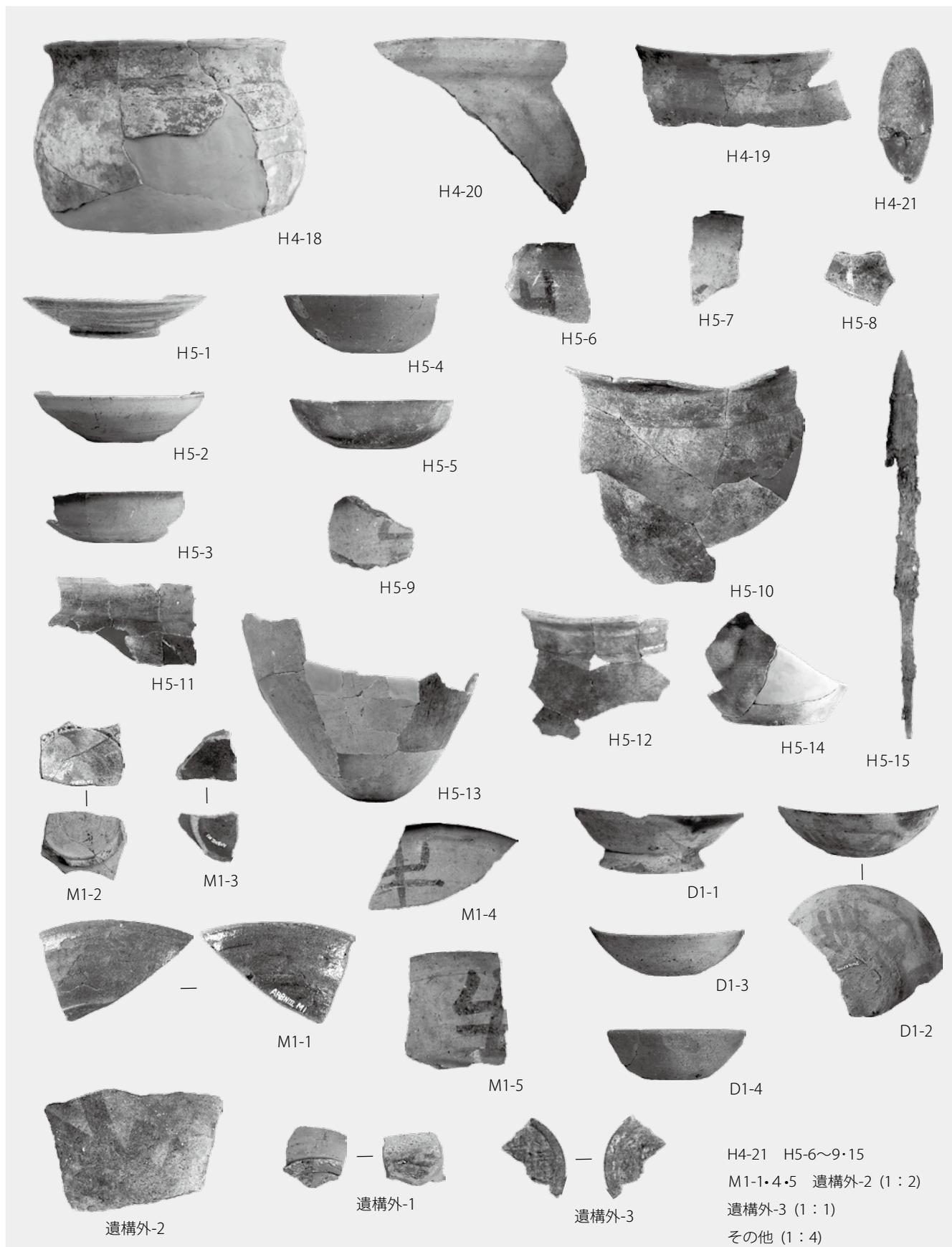


調査区全景(西より)



図版 4





## 報告書抄録

ふりがな	へびづかいせきぐん のまくぼいせきさん							
書名	蛇塚遺跡群 野馬久保遺跡Ⅲ							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第296集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2023年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
へびづかいせきぐん のまくぼいせき さん 蛇塚遺跡群 野馬久保遺跡Ⅲ	さくしさるくぼ  佐久市猿久保 162-11 ほか	20217	119	36° 26	138° 48	20220510 ～ 20220520	224	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
蛇塚跡群 野馬久保遺跡Ⅲ	集落跡	平安	竪穴住居址 5軒 溝状遺構 1本 土坑 2基	土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 鉄製品 土製品				
要約	佐久地域北部、湯川を望む台地上を発掘調査した。その結果、周辺部の調査事例を補強する平安時代と考えられる竪穴住居群が検出された。出土遺物には緑釉陶器や灰釉陶器が含まれ、特に墨書土器が多く出土した。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第296集

蛇塚遺跡群 野馬久保遺跡Ⅲ

2023年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限会社